花例百人一首之絵

紫式部
相生
鴻臺の図
実盛小倉山荘
百人一首と
時雨紅葉
天智天皇
秋の田乃
持統天皇
春過て夏
白妙の
衣ほすてふ
あまの
かぐ山

柿本人麿
あしびきの山どりのおろのしだりをの長々しよ夜をひとりかも寝む
山部赤人
田子の浦ゆうち出でてみれば白たへの富士の高嶺に雪は降りつつ
猿丸大夫
奥山に紅葉ふみわけなく鹿の声きくときぞ秋はかなしき
中納言家持
鵲の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞふけにける

安倍仲麿

森擬法師

小野小町

蟬丸

なり又ばいぶんかゝく
ぬり物よ平者と医る
とりいづき祇園
あくざるしいて事はし
ゆ式ハ七荷七種又
又荷又種三荷三種
等ハ手七荷七種と
いつ荷ハ揃七荷七
種ハ者なり　しんぶ朝
山ハ小袖　帯を
とそるとハ

光孝天皇
天ぐ平め玄の
世ふい者
まれつむ紙
夜ふよ君いのりは

中納言行平
立ワ待いなばの
山乃こ稀又
松ゆるまつとし
きらばいま今ゆくこん

たのもれもとうけ
てらえん乃歯をそ高
こと形を筆おやこく
親まさ八こしこ
他人れ内おとりき
女魔ちこのこかゝと
はけをめさせりふ
ちとれり
こ張月とこひ舞
いりとするなりこと
を人乃かつくまり

五条業平朝臣
子振袖代も
きりとど五田川
かくれなみり
ゆくるは

菊原敏行朝臣
役の江者
きしみ
よるなこ
ちふさ人や義乃
逢坂人めぐ逢ん

伊勢
難波ごさみど
ゑたあーのふみ
まねぐ山よ式
すづてよしや
元良親王
俺ぬきび今
そこはふど
なみはる
糸をはくてを
あつむとぞあり
素性法師
今ちむと
いひしなりふ
老月のゑ月乃
月式まちまつる
文屋康秀
吹ゑに秋の
くさきの
ちるきび
ひべ山うき式
あらしふん

ハうてとろ〳〵紀よまゝ
せ一あるもまへよおくる
事よハたりぬけ荷
おとゝこぶ下男 先人の
ものをすゞ酒とのむと
のまぬもこゝひよいさ
ぐんよてを殘後乃
包根をいぐ紀るさハ
千鳥ゆ〳〵そいてみ
めでことれる私を夏つし
うゝひぐゝぬきたゝゝ

大江千里
月を見ば
ちぐみ
ものゝそ悲しき
つゞ身ひろの
あさゝはあゝねど

菅家
ひきびいぬさも
ゝうあへを
よ向山
まみちのみ
神岩まふく

三條右大臣
名ゆ
あふさうゝ山の
ゆ称ゝ〳〵人
ゝれで
ゆれもゝれ

貞信公
小倉山
ゝのゝ
りみゝ紅んゝ
今ひゝきびゝ
神幸まゝなん

中納言亜相
足の乃ゝ
まれてぎれ
いぢみ川いづき
そ言ゝ
源京子朔北
ぶざくは冬ぞ
ぢびさ
まゝう久る
人めを茶も
かきぬとれりへば
九河内行恒
ゝくみ
おゝぐやれん
秋雲の
ゝたまで
ゝせる
壬生忠岑
有明のはき
なくゝに
おつゝ
ゝれ
ゝきのれ

坂上是則
紀友則
春道列樹
菊原興風

紀貫之
人をいざ
ねもちゝど
梅のさかりは
むかしの香にほひかな
清原深養父
夏の夜はいまだ
宵ながら
明るかと思へば
いづこより
月やどるらん
文屋朝康
吹しく秋の
野の
つゆをきめぬ
玉ぞちりける
右近
忘れじの
行末までは
かたらじ
人のいのちも
なにぞ有るか

春儀等
平重盛
壬生忠見
清原元輔

中納言教忠

謙徳公

曾祢好忠

手ぬりしてをるど
すてて者直れ小神を
めしてちうとうめ
ぢんぞうきちんろ
れし合こんとの主を
雑煮吸われた接ぬ
壁糸りりぶこうを屋
上の方ってハ七五三れ
浄瑠璃りりの方って
ハ二汁五菜ぞまよ
ま方をよりて八吸物

恵蓮法師
い童薄
ちぎまる宿の
さびしきふ人こそ
ふる秋い来ふ夕り

源重之
風をつゝみ
岩つ浩の
そゝぎ乃ぐけて
初代 ひろ

小行ってすまとぐ
明るてをりりを
沈歌いるばしかを
も吐なしぬぞよう
べき扱ま婦 都をよ人
恋ととるぞの世
又ハ部人しき女 乳母
ぞ部ととりおりろ
おりしぬ〳〵ふりまを
さうぐれとをぞ部ろい
ぞぐしくまぐろびれり

大中臣能宣朝臣
御垣ち清士の
そゝく火ろ
秋いりそゝくしろい
きく作
ものをそそ人

菊原義孝
恋ごそめ
うぐぶり
命えなぐも
ぶ部と
ぶりしまれ

若君実方朝臣
のぶやすぶ
えやいづさの
けもづさうを
ちどかりゆるひと
若君道信卿
明あまばくるく
ゆといもりを
なれうはうき
あさぢあ弟
右大将道綱母
歌きくひくり
めるよの明るまい
いふ和ちうさ
ゆとういーる名
儀同三司母
忘れ行末
までいのさくしで
事ゆるぎりれ
命ともぐ弟

歌ばかりにて雅の男女
をもてなす推古の男女
別家にて婦人の所
望かめくらと爲て
けうのいぐけ見たう
おく爲てあるまま
すのにはいろをと親
の朋友ちうりへやの
見舞をとたづねる
おちうりの我をとじて
使者をもてなすとはまと

大納言公任
滝乃音ハさそこ
ひさしくきり
ぬまどの名ハなごし
ゆ実くけれ

和泉式部
あくがれ出し
よみわの乃ちひ
かゆ今ハ
いくもの郎

かぐらをうろうろまい
女房よりくにうの乃
ちをおすこ重ねり
ぬりて用ーよ行ふ事
扇三日めハ女中振舞
嫁ごれ用者ごせ左
仮三絃胡弓ばーい
て吸物五着ハ山海れ
珍味とたくーくそ
るすて三日のうちう
集く歌れのうとを

紫式部
ちぐり逢てうや
ぬまもまんま
ものがたれみし
秋ぬの月うふ

大貳三位
有る山ふかの
乃ち系風雅ハ
いぐうゑ人を
わとれやいすれ

赤染衛門
小式部内侍
伊勢大輔
清少納言

乃ぞまへひざなを
ゑぐいづきこまはなを
こはえへざりるちく
のりのたハ今張れつく
ぐりれやうれよ張ちば
をとりぞうーとく
ゑ乃始末ハかゆうえ
時れりなるバ月ゑま
ゑーくちくれりの
くもとあぎワちちゑ
んやうなりちうれども

方系女道雅

今いまぐ
ゑえんと
ぐうり式
人ぱくなーで
ゑうーをぐふ

桂中納言定家

狩ぐゑゆうぐろ
川雪ゑを
ゑーつまゑれ
ぐーのなーろ木

なーこれれーれ法ゑる
とをするり大ゑる僧也
うんきハ子孫お縁の
りーひ物とまきまふ
ゑれとなり
かくゑ夫婦ゆ中ゆろ
まーれとおやーくゑ
ゑ孫ちぐ大ゑなーぬ
ゑよゑんごれおなう乃
ぐなーぬけーゑと
ゆのゆぐうまーき

桐模

うーみまび
ゑさゑ神ぐふ
ゑるりのを
ゑーくちゑん
名ゑを惜名れ

若大僧正行基

ゑろーゑん
ゑくぐゑふ
ゑるーりくふ
ゑふ人をゑ

月日かさなりて五ヶ月よ
りそなぬを八岩孔雀
けいをみとりく生絹を
八人男よりてきまり乃
たの紬ちり婦れ右の
ものよりて俗よりて
弟ちりて月満て平
産を時は絹を練て
うぶぬきとするのちう
ぶと名五ヶ月ちりハ
うめごれ名称やうぢう

周防内侍

春の夜乃ゆめ
ばかりなる手枕
にかひなくたちん
名こそおしけれ

三條院

名よもあらで
うれよれ
なげくべ
こひしきべき
夜まれ月の宗

紀貫之

あらしの山
こ宮ぬ山の
もみぢ葉ハ
ふるさの
川乃みぎわ

良暹法師

ちぢのさふ
宮ぬちの
鹿ぞ
ものこも
ぬれて
秋の夕暮

第一代とかりゐとし数
よしく卵とゝそゞく
ゆゝしを大なるゝそろ
なりて溢れ出て
ゐれやうる男児安全
なりりをバ世継とて
りてはゆ女子明る時
八江家門ゐろごる葉
なりとゝろあゞ三十日
月八生れ乃家まり
とてゝ花乃神り

大納言經信
ゆゝゞ絶ゝ
門田のいゝだ
ゆゝゞまく
まろやゝ秋風ぞゝく

猪子内親王家紀伊
書に吹のそゝの
ゝ風乃あゞ涼い
ゆゝゞや袖の
めまゝゝそゝれ

前中納言匡房
高砂
おのへのさくら
咲にけり
外山の
霞たゝなゝん

源俊頼朝臣
うのりをる人を
そゝをろ山
ゆゝしそげにゝ
とゝいのゝぬるを

藤原基俊
契をかし
させりが露
命にそあるれ
さらしの秋もいのち
法性寺入道前関白太政大臣
もろびとの
ちだ生くれば
久しさ乃人も井の
まゝに奥はさら治
崇徳院
淵をやを
岩よせるく
瀧川のまれても
末は逢んとぞ思ふ
源兼昌
淡路潟かよ
ちどり乃
なく声さいくよ
須ざあわ
と海の笑ひ

右京亮敦輔
秋風ふく
びく尾の
笛より秋いづる
月は新のさやあさ
待賢門院堀川
みぐるはをんも
きくびくろうの
みぐれてきさは
袖をそぬらす
後徳大寺左大臣
なくなくぎしをさ
はるるうぐ
なぐむしのそぐ
すゑの月ぐ
のこれる
道因法師
ちしの俺さそも
いのちおるあ
うきふそそ
おみぐなるとう

曾我兄弟
世乃中よ
ちらつくて
みなを
おもいいれ
ふかき
おもひなくて
萩原清輔朝臣
みなくへ
はまこの
ごろや
忠ばん
うしろ
見しせ
今いさい
俊恵法師
秋もたけ
ぬ
ふるさと
時雨で
国のひま
さへ
西行法師
なぎて
枯れ
かれは
かくれ
わ
なぎ

蟬丸
七夕乃文
武子門親王
般富門院大輔

小笠原流折形図
のし
こぶひき
あつぎ
すき
ふくさの元
ふくさ
てぬぐい
末広
花
れーろいきんせこ
あび
けかう
えとろのひも
さしはぶえ
くーさする
ぐーはぶ
いとのりめ
おこ
ことのため
べーちく
ぐーく
めてふ
新古今人物言定家
古人をまろやのうつろ
知るだよ夏くや
りかのをうして
西三位家隆
風吹くぐるの
小川乃夕ぐきい
みそだぐ夏の
志ぼーかりまる
大道寺大政大臣
花さそふ
あらしの
庭の雪あらで
ふりゆく
りのい
まぐさなりけり
新古今人物言

後鳥羽院

人をたゝ
うらめし
あぢきなく
世をそむくとは
いかなる

順徳院

百敷や
ふるき
軒端の
忍ぶ
草
あまりなる
ひとしなるまで

作者　田中友水子
擅畫　北尾雪坑齋
筆者　中谷楮同
彫工　藤村善右衛門

文化十四丁丑年正月吉日

大阪書林　舟町　天満屋源治郎
心齋橋通博労町南江入西側
天満屋安兵衛板

43956